■平成 30 年度発表論文一覧

横澤　富士子『スクールカウンセラーから見えてくる児童・生徒の心理に関する理解と対応の研究』

山口　久男『新潟焼山における自然災害・歴史・防災に関する研究』

小野　雅春『ミュージアムにおけるガイド方法についての展開と考察』

大竹　正人『糸魚川ジオパークにおける市民主体のコミュニティ活動から見える計画と実行の記録に関する報告と考察』

竹内　愼治『美山わんぱく広場周辺にある雑木林の環境整備と活用に関する研究』

内山　伸一『糸魚川ジオパークを視点とした日本の地震と新潟の地震に関する研究』

平野　悟『糸魚川ジオパークの地形と水力発電』

■平成 30 年度発表論文概要

スクールカウンセラーから見えてくる児童・生徒の心理に関する理解と対応の研究

横澤　富士子（*Fujiko Yokosawa*）

子どもは、誰もが自分の夢を実現できる素晴らしい可能性を持っている。そして同時に様々な不安や希望も抱えている。その不安を取り除き、子どもの力を最大限に引き出すためには、大人はどんな関わりが必要か考察したい。

新潟県糸魚川市と上越市において、スクールカウンセラーの立場から見えてきた子どもの本音を知り、理解し、解決しようとする過程の中に、子どもの力を引き伸ばすヒントがあることに気がついた。

本研究では新潟県でジオパークの街として、人と自然の環境教育に携わるスクールカウンセラーの立場から実践してきたことを振り返り、良かったことと反省すべき点を検証し今回の研究に取り組むことにした。

新潟焼山における自然災害・歴史・防災に関する研究

山口久男（*Hisao-Yamaguchi* ）

新潟県糸魚川市にそびえる新潟焼山（本文では以降「焼山」と表記する）は北緯 36 度 55 分 15 秒東経 138 度 02 分 09 秒に位置する標高 2,400ｍの小型ドーム状の成層火山で、フォッサマグナの最北端の活火山である。焼山は妙高や火打山と共に頚城三山と呼ばれ、妙高戸隠連山国立公園指定を受け、日本山岳会により日本三百名山のひとつに選定されている。 焼山は、糸魚川ジオパークの 24 ジオサイの一つで 3,000 歳の若い火山であり，気象庁の 24 時間常時観測体制の活火山である。焼山の噴火警戒レベルは、2018 年 5 月現在は、レベル 1 となっていが入山者の安全確保のため、山頂から半径 1 ㎞以内の立ち入りを規制している。（2018 年 11 月 15 日立ち入り規制が解除になる）また、山頂付近には、日本の北限とされる国の特別天然記念物のライチョウが生息している。

又、日本は世界有数な火山国である。日本列島に住み続ける限り、火山との共存を運命づけられている。

火山と上手に共存して行く為には、火山について知ることが必要である。火山は静穏な時間の方が、はるかに長い。静穏な時には火山は幾多の恵みを私たちにもたらしてくれる。火山国日本に生活していく以上、火山についての知識を得て置く事が、私たちの義務ともいえる。

これらの事柄から、本研究では UNESCO 世界ジオパークに認定された、わが国特有の Fossa Magna 地形の代表格である活火山として新潟焼山に着目して、自然災害・歴史・防災に関する研究を進め，焼山ジオサイトを基準に、噴火の歴史、文化や自然との共存を模索し、特徴や魅力を伝え、地域の発展に寄与すべく調査研究を行った。

ミュージアムにおけるガイド方法についての展開と考察

小野雅春（*Masaharu－Ono* ）

来場者に喜んで頂くガイドをすることでフォッサマグナミュージアム（新潟県糸魚川）の利用を増やしたい。そんな思いで３年半、北海道から沖縄までの約５千人の来場者にボランティアでガイドを行ってきた。どうすればミュージアムのガイドをわかり易く、楽しいガイドにできるか、２つの論文を作成しながら検討工夫を重ねた。このたび困難と考えていた小学生からも高い評価を得たので、実践的な活用を配慮して取りまとめ、希望者の多い（経験的に８割程度）ミュージアムのガイド方法として提案することとした。

糸魚川ジオパークにおける市民主体のコミュニティ活動から見える計画と実行の記録に関する報告と考察

大竹　正人（*Masahito Outake* ）

2016 年 12 月に発生した糸魚川駅北大火により壊滅した街並み。家屋・道路の復興は官民努力の成果が結実し、相当なスピードでなされたことは驚嘆である。しかし、人口減少、住民減少には歯止めがかからず、商業施設の再興は難しい問題として残った。本研究の目的は糸魚川市及び糸魚川市近隣を中心とした地域の観光資源の発見、発掘、保護、活用をはかることで地域の魅力を向上させる手法を探り、まちの目玉（シンボル）を創り出し、情報発信を進め、糸魚川市の活性化に寄与貢献することを目的とする市民活動から見える計画・実行に関する記録の報告とその考察である。

美山わんぱく広場周辺にある雑木林の環境整備と活用に関する研究

竹内　愼治(*Takeuchi　Shinji*)

新潟県の西端に位置する当糸魚川地域は、糸魚川ユネスコ世界ジオパークに認定されており、自然の価値が世界的に高く評価されている地域である。特に、翡翠の産地として有名である。本研究の対象であるわんぱく広場は、糸魚川市内中央の高台（標高約 100m）にあり美山公園・博物館ジオサイトに指定されている場所にある。この周辺には、フォッサマグナミュージアム・長者ケ原考古館などの博物館や長者ケ原遺跡公園、そして野球場や陸上競技場などのスポーツ施設があり、春はお花見、夏はキャンプ、秋は紅葉と季節ごとに楽しめる市民憩いの場所となっている。また、わんぱく広場には、子どもたちが元気に遊べる複合遊具やロッキング遊具などが設置されており、家族連れに人気の場所となっている。

本研究の目標は、このわんぱく広場の周囲に広がるコナラを中心とした雑木林を整備して、自然に親しみながら遊ぶ方法を確立することにある。ねらいは、長者ケ原遺跡公園周辺の自然と遺跡の保護や教育活動、ジオツーリズムを通じた地域振興にある。

糸魚川ジオパークを視点とした日本の地震と新潟の地震に関する研究

内山　伸一（*Shinichi Uchiyama* ）

本研究はジオパークの街糸魚川に暮らすものとしての視点から「新潟地震」と「日本の地震」について研究を進めた。

日本では古来より地震は「地中深く大ナマズが存在し、その大ナマズ暴れる」と言われており、江戸時代には地震とナマズの関連を書いた絵図が出版された記録が残っている。この絵図に関しては 1855(安政 2)10 月 2 日に起きた安政の大地震の後、江戸を中心に大量に出版された。又記録によれば江戸末期の安政の南海地震は死者数千人を出したと記録されている。

こうした中で明治期に地震のない国から来た外国人の記録が残っており「津波の襲来を察した紀州の浜口梧陵、刈り取られた稲束に火を放った。燃え盛る炎で注意喚起し、村人を高台に導く。」とあるが、これはギリシャ生まれの作家、小泉八雲（パトリック・ラフカディオ・ハーン)の著書である。恒住八雲の書に関しては「生き神様の」の後に「稲村の火」の物語となって戦前の国語の教科書に載り後に語り継がれていく。

大規模な災害が相次ぐ事で政府や自治体が悩むのは、豪雨や大型台風が近づいている事はある程度の気象予測が可能であるが、地震についての予測は難しいものがある。

本研究においては、予測が難しく、様々な二次災害に繋がる地震について、その現況解析から対応手法に関する考査を行い、日本特有の恵みと災害に対する自然力との共存共栄文化について考察研究を行った。

糸魚川ジオパークの地形と水力発電

平野　悟（*Satoru-Hirano*）

水力発電への関心の高まりと、糸魚川での水力発電所の増設を受け、糸魚川において水力発電が盛んに行われる理由に糸魚川の地形が大きく関係していると考え、それを確かめる調査を行った。その結果、糸魚川の急峻な山岳地形が電力の生産に大きく関わっていることが分かった。また、糸魚川で産出する石灰石の工業利用により、その工場が多くの電力を消費するため水力発電利用の促進がなされていることが分かった。